

Title	開会の辞
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3 : 13-15
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5122
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

開会の辞

聖学院理事長・院長・聖学院大学学長 阿久戸 光晴

皆さん、おはようございます。

O God, Give us

Serenity to accept what cannot be changed,

Courage to change what should be changed,

And wisdom to distinguish the one from the other. Amen.

ご承知のとおり、直訳いたしますと、「神よ、変えることのできないものを受け入れる心の平静さと、変えるべきものを変えていく勇氣と、そして前者と後者を見分ける英知をお与えくださいますように、アーメン」と、こういう祈りでござります。

しかし、ラインホルド・ニーバーの有名なこの祈りを最初に紹介されました私どもの前研究所所長の大木英夫先生は、「神よ、変えることのできるものについて、それを変えただけの勇氣をわれらに与えたまえ。変えることのできな

いものについて、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する英知を与えたまえ」と、逆に訳しました。

私はかつて先生に、どうして逆に訳したのですかということをお聞きしました。そうしましたら、日本ではラインホルド・ニーバーを学ぶ多くの人々が、そしてまた政治家もいるけれども、変えることのできないものをじつと耐え抜いていくという方向で強調点が置かれることが多い。しかし私が知るラインホルド・ニーバー先生は、どちらかといえば変えることのできることで、あるいは変えるべきものを変えていく心の勇気を強調し、生きられた方である。したがって日本ではこれを最初に持つてきたい。それがニーバー先生の祈りの忠実な訳だと思う。こういうお話だったので、私は非常に感銘を受けました。

すぐれた思想家、そして神学者は、相矛盾する両方のエレメントを絶妙の緊張感の中で統合していく思想家だと私は思います。一例を挙げますと、皆さんよくご存じのヘーゲルは、「現実的なものは合理的であり、合理的なものは現実的である」、『法の哲学』の序文でこのように書いておりますが、実はこのヘーゲルの解釈のどちらに力点を置くかで、ヘーゲル解釈ががらつと変わっていくのであります。

既に所与として与えられている現実性の中に、現実の状態の中に合理性を見出していく方向で解釈していく方法と、合理的なものあるいは理性的なものが現実化していくようにダイナミックに解釈し、社会にかかわっていこうとする方法（一時代前ですけども、マルクス主義も含まれます）と、二つのヘーゲル解釈があり得ます。

同じように、このラインホルド・ニーバーの祈りの前、後段のどちらに力点を置いていくかによって、大変重要な二つのニーバー解釈に分かれます。

大木先生が懸念されたように、変えることができない現実を受け入れていく方向でいく、これは決して悪いことではありません。東日本大震災で日本人が世界中で称賛されたのは、起きてしまったこの苦難というものを変えることがで

きないものとしてじつと受け入れていく、セレニティ (serenity) を世界の人々が被災地の方々に見出したのかもしれませんが。しかしながら、もう一つ同時にやはり私たちが考えなければならぬことは、アジアの平和にしても日本における人権・デモクラシーの血肉化、受肉化にいたしましたしても、変えることができることを変えるべきものとして解釈をしていく道があるのであります。

ラインホルド・ニーバーは日本では時々、冷戦期の政治哲学者だと、言われることがあります。したがって、冷戦が終われば過去の方なのでしょうか。私は決してそうは思いません。私はラインホルド・ニーバーの専門家ではありませんが、こよなくこの先生とその教えに敬服する一人です。冷戦終結後にどのような事態が起きているか。歴史の終わりではなくて、民族対立、あるいは宗教文化対立、あるいはその対立の中に人間の欲望対立がうごめいていることも現実ではないでしょうか。

私はこれ以上お話をすることは避けたいと思いますけれども、この中に聖書を愛読されておられる信仰者、あるいはそういった学者の方々がおられるならば、マタイによる福音書の五章から七章を歴史的に神学的にどう受けとめてきたかということにも、かかわりがあると思います。二重倫理でいくのか、五章から七章を実体的な倫理として受けとめていくのか、これもニーバー神学にとつての重要な鍵になるのではないかと思われます。

冷戦が終結した後、そして変えてはならないものもありながらも、変えるべき多くの課題があるこの世界において、とくに日本において本日、新しい観点でニーバーの再解釈、再学習がなされるということは、まことに時宜にかなったことと思います。今日はまことにその課題にふさわしい世界的な学者であるロビン・ラヴィン先生をお招きできましたことは、特別、私たちの誇りとするのであります。

紹介の後、ご講演の始まるときには盛大な拍手をもってロビン・ラヴィン先生をお迎えくださいますように。私も学ばせていただきます。今日一日よろしくお願いいたします。